



WHITE ACADEMEY PTA 実践NEWS LETTER

2020年11月号

お子様の就職活動に役立つノウハウを、ホワイトアカデミーPTA会員限定でお届けします

目次

目次

11月のご挨拶	1
ここ30年間で大学のキャリア教育はどのように変わったか	3
大学の教育が変わって学生の能力は伸びたのか	5
直近10年で大学生のキャリア意識はどのように変わったのか	8
白書から紐解ける親御様の役割	11
終わりに	12

11月のご挨拶

落ち葉が舞い散る今日この頃ですが、いかがお過ごしでしょうか？

今年は穏やかな秋晴れが続き、例年になく見事な紅葉だとあちこちで言われてきましたが、間もなく本格的な冬を迎え、就活シーズンに突入します。

例年、IT業界を筆頭に、選考の早い業界では既に早期選考が行われていますが、今年は採用を見送ったり採用数を絞ったりする企業が続出しており、早期選考に参加するためにインターンシップに参加するのが難しい状況になっています。

以前のニュースレターでお伝えしたように、**OB/OG訪問や逆求人サイトを駆使して1つでも多くのインターンシップを探し当て、2月までに早期内定を獲得**するのが今年の就活でのスタートラインになります。

万が一、内定が1つもない状態で3月を迎えてしまうと、よほど優秀でない限り、いきなり内定を取るのには難しいのが、今年のような厳選採用の年の傾向です。

現時点での21卒の内定率は約7割と、例年以上に就活が厳しくなっている昨今の情勢を鑑みると、22卒の就活は親御様が想定されている以上に厳しくなることが予想されます。

今一度、気を引き締め、どんなに遅くとも**年内には志望職種・志望業界を3つまでに絞り、インターンシップへのエントリーを全て完了**させないと、悲惨な年明けを迎えることになります。

先月号までのニュースレターを今一度読み直し、お子様がどこまで就活を進められているのか、何が足りないのかを入念にチェックしてください。

念のため、特に気を付けていただきたい点を以下に列挙します。

- 自己分析は独りよがりなものになっていないですか？ 就活では、「周りからはどんな人だと言われますか？」という質問をよく投げかけられますが、ここで自己分析の結果と齟齬が見られると、まず受かりません。**自己分析の時点で客観性を担保**できるようにしましょう。

- エントリーシートの内容は完璧ですか？ 面接では、エントリーシートの内容に沿って話が深掘られていきます。エピソード選定のコツや分かりやすい文章の書き方などを踏まえ、**面接ウケするエントリーシート**を書けるようにしましょう。
- 面接練習はどのくらいやっていますか？ 面接の出来不出来を大きく左右するのは、練習量です。ウインターインターンの選考は、応募者が増える分、それまでのインターンに比べて狭き門になります。**他の就活生の何倍も練習しないと、合格ラインには達しません。**

この他にも、細かなアドバイスをしだすとキリがないので、一旦このくらいに留めておきますが、既にお分かりのように、どれだけ精緻な対策ができたかで就活の結果は変わってきます。

先月号までで、**就活の細かい戦術**については多岐に渡って解説してきたので、今後の戦略の見直しも含め、お子様に当てはめながら1つ1つの項目を再度お読みいただければ幸いです。

さて、今月号では、これまでとは趣向を変え、**2018年の大学生白書**から読み取れる様々な統計データを元に、最近の大学生の実情を共有させていただきます。

大学生白書というのは、大学のキャリア教育のここ30年ぐらいの変遷や大学がこれまで何をやってきたかがまとめられたものです。

それに対して学生のキャリア意識はどう変わったかについてのアンケート調査が高校生の時点から経年で取られているので、高校生時点でのキャリア意識が大学生になってどう変化したかも含めて結構詳細なデータが載っています。

編者の溝上さんは京大の心理学の教授で、ずっとキャリア教育を追っている第一人者ですが、白書はビジネス本と違い、データだけが載っているのも、示唆に富む内容がとても多く、非常に内容も面白いものでした。

今号では、その中身を踏まえ、今後、どのように大学生のキャリアについて考えていけばいいのかをお伝えしていきます。

ぜひ、お子様のキャリア意識と照らし合わせながら、この続きをお読みいただけますと幸いです。

竹内健登

ここ30年間で大学のキャリア教育はどのように変わったか

大学のキャリア教育は、主に3つのステージを経て変わってきました。

第1フェーズ：大学教育改革（1991～2008）

大学教育改革では、**シラバスやティーチングアシスタント制度、授業評価アンケートや教員研修が導入**されました。

それまで、大学の講義は先生が生徒側に一方的に喋って終わりでしたが、そういった一方向型のものから**インタラクティブな双方向型の授業**に転換し始めました。

2003年には大学院、2007年には大学で教員研修が義務化され、以来、教員の指導レベルの底上げが図られています。

そもそも、大学教育改革が行われた外部要因は、大学の**定員割れ**が目立ち始めたことにあります。

折しもバブル崩壊で就職氷河期に突入し、2000年台にはITバブルもはじけ、就職難問題を契機として、世間からの大学に対する目線が厳しくなったのがこの時代です。

こういった時代背景を踏まえ、旧文部省（現在の文科省）が主導で大学のサービス改善への舵取りが行われたのが、大学のこの30年間の変遷の最初のステージです。

この時は、「キャリア教育」という言葉はあまり使われず、現在のキャリアセンターも「就職課」という名前でした。

第2フェーズ：学士力の養成（2009～2013）

2008年のリーマンショックを経て、経済界は、大学に対して「学士力」なるものを養成するように要請するようになりました。

学士力というのは、21世紀型市民としての資質や能力である**コミュニケーション力や論理的思考力、問題解決力**などのことです。

それらを養成することを大学の役割の1つに組み込み、各学部でもたしても授業の転換が行われることとなります。

これまでは、学部では専門性を身につけることのみが主眼に置かれていましたが、学士として育てる以上、専門性に加え、就職する上で必要な上述の能力を身につけられるようにするために、専門分野以外の授業も行われるようになったのです。

中でも一番効果的とされたのが、ゼミや課外授業での**アクティブラーニング**です。

講義を聞いて終わりではなく、双方向型の授業をどんどん取り入れていこうという動きが、この頃から一気に広がっていきました。

また、この時代には、以下のサービスプロポジションが明確にされていきました。

- **アドミッション・ポリシー：入学受け入れ方針**
- **カリキュラム・ポリシー：生徒指導方針**
- **ディプロマ・ポリシー：学位授与方針**

大学が、どのような人を受け入れ、どのようなカリキュラムで指導し、どのような能力を身につけたら学位が与えられるかを明確にすることで、育てる人材像を大変分かりやすい形にしたのです。

各大学のどの学部に入ると何が得られるのかが分かりやすくなったと同時に、大学間の広告競争が激化していったのがこの頃でした。

この頃から、「学士力を身につける＝キャリア教育」という形で、徐々に大学の中でキャリア教育の礎が築かれてきました。

第3フェーズ：高大接続（2014～）

学士力の養成という基本方針に則り、**実際に教育の品質は良くなっているかについてPDCAを回しながらチェック**しているのが、現在に至る大学教育の在り方です。

大学教員を含め、どんどんアクティブ型の授業を入れていこうという気運が高まっており、学生のアクティブラーニングへの参加率も上がっています。

授業が楽というだけでなく、会話を促されて授業が盛り上がる、コミュニケーション力がつくなど、様々なメリットがあるということで、アクティブラーニング型の授業が急増しているのです。

加えて、入学前の段階でミスマッチが出ると良い教育の成果が出ないことが認識され、**高大接続**で学生の成長を促していく気運が高まってきました。

入試改革もその一環として行われており、高等教育を受け始める段階、つまり高校卒業時点でどのような能力を身につけておくべきかが絶えず検証されるようになっていきます。

大学の教育が変わって学生の能力は伸びたのか

白書では、学士力を**他者理解力、計画実行力、コミュニケーションリーダーシップ力、社会文化探求心**の4つに分類しています。

他者理解力に関しては、高校2年生の時に他者を理解する能力が高い人は大学1年生以降になってもその能力が高く、これについては**大学教育ではあまり変化しない**ことが分かります。「変化なし」群が60.2%で、成長したなと思うのは23.3%、逆に他者を理解する力が落ちたと思っているのが16.5%なので、**大学のカリキュラムを受けていくと他者理解力が若干上がる**というのがこのデータの帰結です。

一方で、**計画実行力**では、「変化なし」群が全体の49.2%で、成長したな、つまり自分が物事を計画的に考えられるようになったなという人が23.6%です。

ここから考えていくと、27.2%は計画実行力が落ちたと思っていることが分かります。

そもそも高校生のうちは、受験や部活動で明確な目標があり、そこから計画を逆算して取り組む人が多いですが、大学に入ると自分で目標設定をしないとけません。

サークルには目標がないことが結構ありますし、就活もだいたい先なので、目標が持てないという学生も見受けられます。

少なくともデータだけを見ると、**大学の授業を受けると計画実行力が落ちると**取られてもおかしくないようなものになっています。

コミュニケーションリーダーシップ力に関しては、51.3%が変化なしと回答しています。

成長し、コミュカがついたという人は24.4%なので、24.3%はコミュカが大学に入って落ちたということです。

具体的に言うと、毎日スマホゲームばかりやっていたり、陰キャラでより人と喋らなくなったりという学生もいると思います。

アクティブラーニングをどんどんやっていて様々な大学でコミュニケーションを取る授業が増えているにもかかわらず、**あまりコミュカがついていない学生もいる**というのが正直なところです。

最後に、**社会文化探求心**、要するに勉強するかということですが、変化なし群が47.9%、成長群が24.2%である一方、27.9%が逆に低下したというデータになっています。

大学に入ると勉強しなくなる学生が一定数いることが裏付けられています。

主体的な学習態度が能力の習得に影響を与える

大学でこれら4つの能力を習得する際に影響を与えるのは、主体的な学習態度であるというデータが出ています。

つまり、**主体的に授業やアクティブラーニング、課外研修に臨む学生は、どんどん他者理解力や計画実行力が伸びる**ということです。

ちなみに、主体的な学習態度は、将来の見通しが立っているか、それに向けて何を実行していけばいいのかが明確になっているほど醸成されます。

簡単に言うと、**先々のビジョンが明確で、そのためにやるべきことが授業と関連していると、当然、主体的にその授業を受けて能力が伸びる**ということです。

これらは、高校生の時のキャリア意識と相関するので、**高校時点でどういうキャリアを描きたいかが明確になっている人は、大学に入った後に、これがやりたくてそのためにはこれを学びたいという内容が明確になります。**

そうすると、主体的な学習態度が醸成され、それによって授業に参加することで他者理解力や計画実行力、いわゆる学士力と呼ばれているような能力がどんどんついていくのです。

逆に言うと、キャリア意識が高校時点で低い人は学習態度も低く、大学に入学後に身につく能力も低くなります。

また、アクティブラーニングに参加する人の相関性を見てみると、**主体的な人やコミュニケーション力がある人がアクティブラーニングに参加している**ことが分かります。

アクティブラーニングでは、様々な人と喋らないといけないので、コミュニケーションが求められます。

コミュニケーションが元々得意な人は参加へのハードルが低く、「より学びたい、将来に向けてこれをやりたい」という主体的な学習態度の人も参加する傾向にあります。

逆に言うと、コミュ力が低かったり主体的でなかったりする人はアクティブラーニングの授業を面倒臭がり参加しないということです。

このように、データで見ると、当たり前ですが、大学教育は効く人には効きますが、効かない人には効かないことが分かります。

大学1年生以降の資質や能力学習、キャリア意識は高校2年生時点のそれらに大きく影響を受けているので、高校時点でキャリア意識が全然なく、やりたいことも何もないのに、とりあえず大学に入ってしまった人の能力や意識を大学がゼロベースで育てるのは難しいのです。

ちなみに、この白書のタイトルは、「今の大学教育では学生を変えられない」というものであり、白書の中では、大学教育で出来ることと出来ないことが明確にされています。

高大接続のキャリア教育が必要だということはデータから見ても明らかですが、**高校段階でのキャリア教育の必要性や大学の意義が改めて問われている**と言えそうです。

直近10年で大学生のキャリア意識はどのように変わったのか

将来の見通しがあり、それに向けて何をすべきか分かっていて実行している学生は減少している

「将来の見通しがあって何をやるべきか分かっていて今実行しています」と答えた大学1年生の比率が24.7%から20.3%まで減っており、大学3年生についても32.3%だったのが25.1%まで減っています。

将来のことを考えて大学生活をバリバリ主体的に送ろうという人は減っているようです。

逆に、増えているのは、**見通しがない**という大学生で、1年生だと32ポイントから36ポイント、3年生だと25.8ポイントから35.7ポイントへ10ポイント増えています。

さらにもう1つ増えているのが、**見通しはあるけれども何をやればいいのか分かっていない**大学生です。

見通しはあるし、理解はしているものの、時間がなくて何もやっていないタイプの人も減っているということなので、**見通しが立っているけど、何をやっていいかわからない、見通しが立っていないという人がどんどん増えています**。

1年生だと、全体の70%に当たる学生が、この辺りについてモヤッとしている状態になっているということです。

人生をどのように過ごしたいかの見通しが立っている学生が昔より減っている

就職や将来のことが気になり、「今を生きていない、充実していない」と感じる学生が35.8%増加しており、今の学生は**仕事や就職のことばかりが頭の中を占めている**ことが分かります。

将来における見通しにおいて最も重視するものとしては仕事や職業が挙げられていますが、この見通しが立っていないという学生が増えているのです。

実際、将来の見通しがない学生が増加しているので、本来、大学の勉強では主体的な関与が求められているにもかかわらず、**自立のエンジンが落ちている学生が徐々に増えています**。

原因として考えられるのは、教育や日本の社会の問題ではないでしょうか。

日本の教育は、自立を促進するようなものにはなっておらず、どちらかというと、**集団圧力や同調圧力を非常に強化**している節があります。

小学校では、隣の教室に行くのに列を作っていかなければいけないという嘘のような本当の話を聞いた時は、私も衝撃を受けました。

思い切り暴れ回るようなことは促進されておらず、非常に画一的な集団主義的な教育が行われる中で、子供の頃から閉塞感を植え付けているのではないかとことをとても感じています。また、平成になってからコンプライアンスがとても声高に叫ばれるようになり、そればかりを気にしていたら窮屈になってしまい、**何も考えずにただ指示に従っているだけのほうが楽**という雰囲気が出ているかもしれません。

バブルの頃は、何かとりあえずやってみようよってという全体の空気があったと聞いていますが、今年の1月にインドネシアのバリに行ってきた時に似たような雰囲気を強烈に感じました。

経済が上向いていると、大体、何かやったら上手くいくので、とりあえずやってみようという雰囲気になるのかなと思います。

経済が停滞し、今までは皆が上を向いていて「何かやってみよう」と前向きだったのが、足を引っ張り合ったりコンプラを意識したりするような雰囲気になってしまうと、学生の思考も徐々に閉塞感に苛まれていくのかなと思います。

今は情報が手に入りやすくなり、自立している人にとってはこんなに良い時代はないはずですが、自立のエンジンが落ちてしまっているのが実情です。

キャリア意識全般について

・就職後3年以内に転職しようと考えている人は女性に多く、増加傾向にあります。

転職がトレンドになったのは2013年あたりからで、私が就活をしている時も、主に人材紹介会社が「転職の時代」と言っていましたが、やはり増えてきたという実感があります。

女性は子供を育てるタイミングがあるので、転職を考えるケースも多いと言えます。

・働く時間が短い仕事や高い収入が得られる仕事に就きたい学生が増加傾向である一方、仲間と楽しく働ける仕事や専門知識・特技を活かせる仕事に就きたい学生は減少傾向にあります。

これは衝撃的ですが、最近の学生は、働く時間が短くホワイトな方が良いということなのでしょう。理想の仕事としては、働く時間が短い仕事が11.5ポイント、失業の心配がない仕事も17.8ポイントまで増えました。

働く時間が短く失業の心配がない仕事に就きたい学生が徐々に増えているようです。

また、健康を損なう心配のない仕事に就きたいという学生や高い収入が得られる仕事を希望する学生も増えていますが、逆に減ってきているのが、仲間と楽しく働ける仕事や、その先にある、責任者として裁量が増える仕事を希望する学生です。

独立して人に気兼ねなくやれる仕事や専門知識・特技が活かせる仕事を希望する学生も減っています。

弊社の企業理念は「いい仲間といい仕事」であり、いい仲間と何か意義のある仕事をやっていれば仕事は楽しいし、それが本来、仕事の醍醐味なのではないかと私は思いますが、最近の学生には、ウケないみたいです。

・仕事より余暇の中に生きがいを求める学生が徐々に増えてきています。

仕事は早く片付けてできるだけ余暇を楽しみたいという学生の割合はあまり変わっていませんが、全体の25%ぐらいはいます。

37.5%が仕事にも余暇にも同じくらい力を入れると答えていますが、これはすごく良いことかなと思う反面、昔に比べて減ってきています。

それ以外はあまり変わってないみたいですが、余暇を楽しみたい学生が増えています。

最近の学生は仕事を楽しいものと思っていないのかとありますが、「企業戦士」みたいなことが言われていた時代とは徐々にキャリア意識が変わりつつあるということがデータで出ています。

弊社の社員を見ていても、バリバリ仕事を楽しんでいる人もいれば、週に1回旅行に行っている人もいて、本当にそこは人それぞれです。

白書から紐解ける親御様の役割

先月のニュースレターで就活指導の全体像について説明させていただきましたが、親御様には、就活指導の際に、**生き方やそもそも仕事とは何か**についても教えていただきたいです。白書の内容を踏まえ、社会的な状況を把握した上で親御様にやっていただきたいことを考えると次の2つに集約できます。

1つ目は、**将来どうなりたいか、そこに向けて今何をやるべきかを明確にすること**です。

それを考えられない学生が増加傾向であるということであれば、やはり大学が対処できないこの部分をリードするのが親御様の存在意義だと思います。

具体的には、**職業観や「仕事ってこんな感じ」という将来のイメージ、ビジョンを膨らませてあげる他、実際にその仕事に就くためにどんな能力がいるか、どんな計画で就活対策をやっていくか、行動管理、成功体験**が含まれます。

この辺りは意義があることなので、重点的にやっていった方がいいかなと思っています。

2つ目は、**お子様の意思決定を支援してお子様自立しながら自分の人生を選択できるようにする**ということです。

自立できない学生が増えているので、お子様をどう自立できるようにするかということが親御様にも強く求められます。

中には、お子様が自立せず家でゴロゴロしながらスマホゲームばかりやっているの、見かねてホワイトアカデミーに預けられるというケースもありますが、どうやって自立して自走できるようにするかは社会的にも大きな関心事です。

会社経営をしていても、やはり自走できる社員の方がありがたいのは間違いないと思いますが、ポイントは、**意思決定の習慣が身についているか**です。

論理的に意思決定する場合もありますし、感情的に意思決定する場合もありますが、**自己を確立し成功体験が積まれてくると自分で物事を意思決定して自分で人生を選択しようという気になっていく**のかなと思います。

終わりに

今月号では、大学生白書を元に、今時の高校生や大学生がどのようなキャリア意識を持っているのかを考察してきました。

大学でできるキャリア教育には限界があるので、親御様におかれても、お子様のキャリア意識を上手く醸成されていくことが、お子様が自立する上で欠かせないことであるとお分かりいただけたのではないのでしょうか。

就活では、これまでに培ったお子様のキャリア観を元に、その後のキャリアをどんどん具体化していくこととなります。

その過程で親御様にできるサポートも多々ありますので、今回のニュースレターの内容を踏まえ、改めてお子様が就活に取り組むプロセスを見守っていただけますと幸いです。

それでは、また来月お会いしましょう。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

竹内健登

White Academy PTA実践ニュースレター

発行者：Avalon Consulting株式会社

住所：東京都新宿区西新宿3-7-1新宿パークタワーセンターN30階

電話：03-5326-3606

HP：<https://avalon-consulting.jp>